

異類婚説話の變容

——中國戀愛文學史素描の試み——

中 鉢 雅 量

人間が、神仙や幽鬼などの異類と結婚する話は、古今東西を問わず類例が少なくない。しかしそれらは、時代や地域によってその様相をさまざまに變える。本稿は中國の異類婚説話の、時代による變容を追跡し、ひいては戀愛文學一般の發展史を大ざっぱに描こうとしたものである。

一

六朝の志怪小説を代表する搜神記に、次のような話がある。

弦超という男の夢に成公知瓊と名のる神女が現われて降嫁を豫告し、數日後知瓊は車に乗り、侍婢を従えて嫁入りして来る。天上の珍しい酒食を携えていたが、それで弦超と宴し、詩を贈り、二人は夫婦となった。數年後弦超の父母は息子に嫁を迎えてやるが、智瓊はその嫁と鉢合わせしないように日夜を違えて通ってきた。

ある時弦超は不用意にそれを他人に漏らしたため、智瓊は形見の品を残して去る。五年後旅途で再會し、しばらくいっしょに暮らし、以後も日を定めて男のもとに通ってきた(卷一)。

この他卷一に、神女が園客の養蠶を手傳う話、同じく機を織って董永の借金の返済を助ける話、杜蘭香という神女が若い男に降る話など

があり、神女が降臨する形が一般的だが、卷四の、河伯の娘と結婚した話のように、男の方が神女のもとを訪れる形もある。一方幽鬼との結婚を説くものは、卷一六に四つまとめて載せられている。一例をあげる。

盧充は射て傷を負わせた麋を追って行き、とあるお家敷に招じ入れられ、その娘と婚禮を挙げ、三日間の宴會の後、家に歸された。家族と話しているうちに近くにある崔氏の墓に入ったのだと判明した。

四年後の三月三日、崔氏の娘が牛車に乗って川を渡って来て、二人の間にできた男の子を盧充に渡し、序でに金のお碗と詩とを贈った。盧充はそのお碗を賣りにいって崔氏の娘の伯母に當たる人の目に止まり、それが崔氏の娘の副葬品だとわかる。その後男の子は立派に成人して郡守を歴任し、子孫も高官となって富み榮えた。

結婚する相手が良家の娘の亡靈であるために、男は金持ちになり、二人の間に設けた子も出世する、というものである。すぐ前である談生の話にも、これらの點は共通している。

このような異類婚説話は、どんな意圖で作り出されたのだろうか。柳田國男は『桃太郎の誕生』⁽¹⁾で、神から遣わされた者が人間と結婚

して子を設け、名家を興こすという型のさまざまな説話を集めてゐる。その中には桃太郎や一寸法師などよく知られた話の他に、たとえば次のようなものもある(筆者の要約によって示す)。

ある家の先祖に笛の名手がいた。大蛇がそれを慕い、美女に化けて来て妻となり、一子を設ける。産屋を覗くなど戒められたのに盗み見したため、蛇體となつて去る。わが目を千兩箱に變えて子どものために残していった(二二二頁)。

柳田國男によれば、これらの話は、人間が神々と「血を合はせ縁を繋ぎ新たに榮ゆる家を立てる」(二二三頁)のを語るものであり(桃太郎に妻求めの部分がないのは、傳承の過程で脱落したのだとする)、ある家の血筋は神々と繋がつていて、その富貴は神々から約束されたものであると誇る人々(多くはその家の子孫)によって作り出されたものだといふ。

前掲二つの幽鬼との結婚説話も同じ事情で作りに出されたのではないかとというのが筆者の考えである。柳田國男の擧げた例は多く神々との結婚説話であるのに、こちらは幽鬼との結婚であるという違いはこの際問題にならない。「家々の祖靈の休らふ處から、再び若々しい優れた生命が、子孫の之を愛慕する者に供給せられるが如く、信じ且つ話していた時代があつて」(柳田前掲書六八、九頁)、その點では神鬼を區別しなかつたと考えられるからである。

搜神記の幽鬼との結婚説話の残りの二つは、韓重という若者と吳王夫差の娘の亡靈とが契る話と、辛道度という男が秦の閔王の娘の幽鬼と夫婦になる話である。どちらも二人の間に子どもができた形跡はない。ただし後者には、女から贈られた金枕が縁で、男は秦王に駙馬都尉にとりたてられ、金帛車馬を賜わつたとあり、前者にも女からさし

わたし一寸の明珠を贈られたとあるから、結婚によって金持ちになるという筋書だけは備わつてゐる。

神女との結婚の場合でも、家の始祖となる子どもを設けるとの一條はどれにも脱落しているが、男が贈り物をされたり(成公知瓊や卷四の河伯の娘との結婚)、そうでなくとも、結婚によって男が何らかの利益を得る(卷一の園客や董永の話など)點は共通して見られる。やはりある家の富は神授のものだと誇る説話なのだろう。

いづれにしてもこれらの話は神女鬼女と人間との恋物語などではなく、このように極めて民間信仰的色彩の濃いものである。後世の異類結婚説話が次第に恋愛に傾斜することは以下に説く通りだが、それらとは異質のものであることをここで確認しておこう。

二

下つて唐代の傳奇小説にも、異類婚に取材した話は少なくない。たとえば「李章武傳」は、ある女の亡靈が生前親しくしていた男のもとに現われ、男もそれを承知しながら、一夜の歡を盡くして別れる、というものだが、志怪的要素はまだ隨所に残存している。幽鬼が現われる際には、「室の北角に悉窾として聲有り」とか、男との交歡の際にも、「しばしば請いて人をして明星を視せしめ」て夜明けになるのを氣にしたとかいふのがそれである。また女が別れ際に男に贈つた「棘鞞寶」をめぐる記述がかなりあり、この點でも六朝志怪からの距離が遠くないことを思わせる。

にもかかわらず一方では二人の愛情が描寫されており、もはや單なる志怪小説ではなくなつてゐる。男が幽鬼と交歡する場面は次のように描かれる。

昔見しのと異ならず。但だ舉止浮急にして、音調輕清のみ。章武牀を下り、迎え擁して手を携え、款は平生の歡の如し。自ら云う、冥録に在りて以來、都て親戚を忘る。但だ君子を思ふの心は、平昔の如きのみ、と。章武倍々與に狎暱するも、亦他異なし。

當然ながら當時の人々には幽鬼は畏怖や嫌惡の對象ではない。だからこそこのような人鬼間の愛情が成立し得たのである。

「任氏傳」は、狐の精が美人に變身してある貧しい男に獻身的に盡くし、男もそれを知りながら受け入れる話で、最後に男の無神經さから、任氏は獵犬に殺される。二人の出会いから同棲を経て破局に至る筋の運びは、作者自らが「異を志した」と言うように、まさに志怪のそれであるが、他方では二人の細やかな愛情がさまざまに表現されていて、恋愛小説的な一面も窺われる。

なお中間に、任氏が異術を發揮して大いに男にもうけさせたところ、ここでも六朝志怪の餘韻を見ることが出来る。

動物もこの時代にはむやみに恐れられたり嫌われたりはしなかった。搜神記には動物が人間との間に子を設け、その子孫が榮えるという話がいくつかあり、その背景には、柳田國男のいうように、神靈が假に動物の姿となつてこの世に現われるという民間信仰が存在する(前掲書)。従つて動物は畏敬や親愛の對象だつたであらう。唐代でも事情はほぼ同じで、「任氏傳」はこのような動物觀を前提にして始めて成立し得たと言へる。

三

しかし宋代以降、幽鬼や動物の精は時に人間をたぶらかし、危害を加えらるとされて次第に畏怖の對象となつてくる。こうした背景のもと

に、前代の異類婚説話は二つの傾向の戯曲小説に發展する。

(1) 幽鬼や動物の精が美女に化けて男を誘惑し、時に危害を加える話。

(2) 神女と若者との恋愛譚。

先ず前者を見よう。

『警世通言』所收の「崔待詔生死冤家」は次のような話である。⁽⁶⁾
玉細工師の崔寧は、ある大官のお屋敷に出入りしているうちに奉公人の秀秀と親しくなり、火事のどさくさに紛れてかけおちする。しかし居所が知れて二人はお屋敷に連れもどされ、秀秀は斬られ、崔寧は流罪となる。直ぐ秀秀は亡靈となつて現われ、そうと知らない崔寧に再び連れ添う。やがて崔寧に知られるに及んで、秀秀は彼を道連れにして冥土に歸す。

幽鬼は畏怖すべきものという考えは、崔寧がそれと知つて、告姐姐、饒我性命。

と頼むところや、それが聞き入れられないで殺されるところに明確に表現されている。

動物の精が美女に化けて男を誘惑する話としては、『清平山堂話本』所收の「西湖三塔記」「洛陽三怪記」などがある。前者を紹介する。

ある若者が、迷い子になつた女兒のせわをしてやったのが縁となつてさる邸宅中に案内され、そこにいた婦人と契る。半月後歸宅したいと言ひ出したら殺されそうになり、かつてせわをした女兒に救出される。逃げ回つていたので見つかつて再び拉致され、今度も女兒に救われる。道士となつていた若者の叔父が彼らをとりのおさえる。案内役の老婆は嬪、婦人は白蛇、女兒は鶏の變じたものであつた。道士は三つの石塔を湖中に樹て、その下に三怪を鎮める。⁽⁶⁾

後者も類似の話である。二作品の、動物の精への對し方は、前述の幽鬼へのそれと同じである。

幽鬼や動物の見方がこのように變わってくるのは、宋以後市民社會が發展し、自我の覺醒が促され、人間中心の物の考え方が強まってくることに關係があるように思われる。唐代以前の人々は、魯迅も指摘するように、「幽界とこの世とは別々ではあるが、人間も幽鬼もどちらも實際に存在する」と考えており、ある意味では神・鬼・人が渾然一體となつて生活して來たのだが、宋以後漸く神鬼の實在が疑われるようになり、それらから切り離された人間獨自の生き方が求められると、以前の敬愛の念は次第に薄れていったものと思われる。特に幽鬼や動物は人間を畏怖させるものと見なされるまでに零落した。ここにあげたような話は、このような背景のもとに成長したものである。

四

(2)の恋愛譚を考察する前に、*恋愛*の語義を規定しておきたい。

恋愛は、それに伴なう行爲的側面もさることながら、その過程で惹き起こされる、歡喜や苦惱などのさまざまな心理作用がより重要な側面である。スタンダールはその『恋愛論』の中で、この心理作用を詳細に分析しているが、それによると恋愛には二つの結晶作用がある。あの人はさまざまな美點をもっていると、恋人を飾り立てて楽しむのが第一の結晶作用で、更に進むとかえつて何かの拍子に「あの人は本當に私を愛しているのだろうか」と疑惑にとらえられ、「しかしあの人がなしに自分の幸福はあり得ない」と思い悩むことがある。これが第二のそれで、後者の方が恋愛を持続させる、より重要な要素である。そしてこれらの心の働きは、社會が一定の發達段階に達すると現わ

れ、従つて未開人には見られないものだといふ。⁽⁹⁾ さて(2)の恋愛譚は元雜劇の中にいくつか見出される。たとえば「張生煮海」がそうである。

天上の東華仙は、瑤池會の席で邪心を起こした金童・玉女を罰として人間界に轉世させ、二人は書生・東海龍女の娘に生まれ變わる。東海のほとりに遊んだ書生の張生は、その石佛寺の一室で琴を弾いていると、龍女が聞きつけて訪れ、二人は相愛の仲となる。龍女は八月十五日中秋節の結婚を約して去る。

その日まで待てない張生は龍女の後を追う。途中出會つた仙姑にわけを話すと、海水を蒸發させて龍王に娘との結婚を認めさせるようにと、それを可能にする術を授けられる。海水が干上がつて慌てた龍王はその結婚を許す。最後に東華仙が登場して二人を天界に連れもどす。

以下に二人の心の動きを取り出してみよう。龍女に會いたい一心で海岸に探しに出るが、女は水中遙かに去つて姿を見せない。しかし張生はいつまでもあきらめ切れないで、「只是小娘子誰着你聽琴來」(二折)と悲しんでいる。

そこで仙姑から海水を蒸發させる術を授かると、喜んで試みる。龍女が出てくるまでは止めないというすさまじさである。石佛寺の長老を、

秀才家能軟款。會安詳。怎做這般熱忽喇的勾當(三折〔倘秀才〕)。
秀才というものは物腰が柔らかでゆつたりしているものなのに、
どうしてこんなむちゃくちゃなことをするのだろうか。
とあきれさせている。

一方龍女の熱烈さも張生にひけを取らない。彼に再會かたつた龍女

は、

則爲這波濤相間的故人疎。我則怕黑漫漫各尋別路。受了些活地獄。下了些死工夫。海角天隅。須有日再完聚(四折「新水令」)。

ただこの波濤に隔てられてなじみが薄くなり、眞暗な気持ちでそれぞれ別の道を歩み、生き地獄の目に遭い、死の日月を送る仕儀になることを恐れていました。でも一方では海角、天隅と遠く離れていても、きつとまたお会いできるだろうと願つてもおりました。と心中を告白している。これは明らかに神女との結婚説話の外殻を借りた恋愛物語である。

「柳毅傳書」は唐傳奇の「柳毅傳」をもとにしており、涇河の岸邊を通りかかった柳毅が、嫁ぎ先と折合いが悪く、そこで牧羊させられていた龍女から手紙を託され、それを實家の洞庭湖にとどけてやり、それが縁となつて、龍女と結ばれる話である。二人の恋愛は「張生煮海」ほど熱烈ではない。しかし作者の意圖はやはりそれを敘すことにあつたのは、「柳毅傳」と比較すれば明らかとなる。

龍女の、柳毅に對する眷戀の情はむしろ「柳毅傳」の方が著しい。ただしそれは自然な愛情というよりは、嫁入りした龍女が柳毅に、「君の恩を衞み、心に誓いて報いんと求む」とか、「他類を以て遂に無心と爲す勿れ、固より當に報いるを知るべきのみ。」と言つてゐるように、恩返しへの感が強い。柳毅の龍女に對する気持ちが残んど述べられていないことも、戀愛文學としての色彩を薄める。

「柳毅傳書」の場合はどうか。初め龍女との縁談を持ち出された柳毅は、涇河の岸で牧羊していた龍女の憔悴した面もちを思い浮かべ、氣乗りしないまま、かと言つてそれを斷る理由にもできず、そこで尤もらしく、

我柳毅只爲一點義氣涉險寄書。若殺其夫而奪其妻、豈足爲義士(三折)。

と大見えを切つてゐる。因みに「柳毅傳」では、縁談を斷つた第一の理由は、

夫れ始め義行を以てこれが志と爲すに、寧んぞその婿を殺してその妻を納むる者あらんや。

と、「柳毅傳書」では口實に過ぎないものが、大まじめに述べられてゐる。

「柳毅傳書」では、一旦縁談を斷つた後、龍女が柳毅の前に姿を現わす。装いを改めてかつての面目を一新していた。それを見て柳毅は、「比那牧羊時全別了也。早知這等、我就許了那親事也罷。」(三折)と後悔する。

歸宅すると母親が縁談をもちだす。そこで「當初龍女三娘要招我爲婿、我雖不曾應承、却心兒裏有他來、何忍更娶別人。」(四折)と心中を告白しているが、前から一貫した心理としてうなずかれるのである。

この龍女にも、「柳毅傳」の場合と同じ「報恩」の觀念がなくもないが、あまり目立たない。主流になつてゐるのは、たとえば次のような男女の思いである。

誰想並頭蓮情斷藕絲長。搬調的俺趁波逐浪。正是相逢沒話說。不見却思量。全不肯惜玉憐香。則他那古儼性尙然強(四折「新水令」)。

思いがけなくも一つの莖から生い出たつがいの蓮が、間を引きさかれて物思いに沈む仕儀となつた「藕絲」は蓮の纖維からとる糸。「偶思」にかける。すっかりいいようにされて私は波のまにまに浮き沈み。本當に「逢つても話すことはないが、見ないと心は千々に亂れ

る」だわ。あの人は全く情をかけて下さらない。あの意地っ張りはおかなか直りそうもないわ。

これらの作品は、つまり人間同士の戀愛を扱った他の作品——「西廂記」「牆頭馬上」「兩世姻緣」などと本質的には同じである。ただこれらとは幾分違った道具立てを用いて目先を變えているに過ぎない。

「誤入桃源」も仙女と契る話で、劉晨・阮肇の二人が天台山で道に迷い、桃源境で二仙女と夫婦になるといふ故事を敷衍したものが、説話の世界がほぼそのままもちこされていて、戀愛物語的色彩はほとんどない。時代が移っても、全ての文學作品がそれに添って變容するとは限らないのである。

元明の小説にも神婚譚に取材したものがいくつかある。『雨窓欒枕集』所收の「董永遇仙傳」、『喻世明言』所收の「李公子救蛇獲心」、『二刻拍案驚奇』所收の「疊居奇程客得助 三救厄海神顯靈」などが、神女と結婚して子どもを設けたり、富貴になったりするのが一作の眼目であるらしく、戀愛小説への發展は見られない。

五

以上で異類婚説話が元明の戯曲・小説で二つの方向に展開したことを確認した。ところが意外にも、この流れとは一應別だが、やはり異類婚説話から分岐したと思われるもう一つの流れがある。唐・段成式『酉陽雜俎』續集卷三に次のような話が見られる。

唐の天寶中、處士の崔玄微が月のよい春の夜に庭中に佇んでいると、突然十數人の女子が現われて玄微に挨拶し、遅れて封十八姨と呼ばれた女性も到着した。酒宴になり、めいめい歌を唱った。そのうち、なかの一人と封姨とがいさかきを起こし、封姨は怒って去っ

た。衆女が言うには、自分たちはこの園中に住んでいるが、いつも悪風に惱まされる。それで封姨に頼もうとしたのだが、怒らせてしまった。どうか處士殿、朱い幡を庭の中に建てて下さらないか、と。その通りにしてやったら庭の花だけは風に飛ばされないで済んだ。衆女は花の精で、封姨は風の女神であることがわかった。

このように植物の精が大勢で男のもとを訪れ、酒宴し、詩歌のやりとりをするという話は、後述するように後世の戯曲・小説、わが謡曲などにさまざまな形で生かされているが、實はこれは異類婚説話とながっている。

唐傳奇の「周秦行紀」は牛僧孺撰と傳えるものだが、次のような話である。

牛僧孺は科擧に落第して歸郷する途中、日暮れて道に迷い、とある豪邸に行きつき、そこで漢の文帝の母の薄太后、王昭君、楊貴妃等と出會い、酒食・管絃のもてなしを受け、詩を應酬する。夜更けて王昭君と枕席を共にし、次の朝辭去したが、そこは薄太后の廟だった。

男が衆女と酒を酌み交わし、詩を唱和する點が前の話と共通している。

更にこの「崔玄微」「周秦行紀」のすじは、搜神記の異類婚説話といくつかの類似點がある。たとえば前掲の成公智瓊や盧充の話では、いずれも女は數人の供回りを従えて男といっしょに飲食し、詩を贈っている。相異するのは「崔玄微」「周秦行紀」が一夜だけの歡會であるのに、これらではより長期にわたって夫婦となる點だけである。

従つて「崔玄微」「周秦行紀」を異類婚説話の一變型として理解することが出来る。男が黄河の源へ旅する途中、神仙の窟へ行きつき、

二人の美女から一夜の歡待を受ける、という例の『遊仙窟』も二作品と同日の談である。

さて『醒世恒言』所收の「灌園叟晚逢仙女」は、この崔玄微の故事を枕に使い、以下に、花作りに精魂をこめていた老人が、近くに住む無頼の徒に花園を荒されて困っていると、仙女が降臨して無頼を懲罰し、花園を元通りにしてやるという話を展開している。植物の精との交歡というモチーフの一つの應用と言えらる。

このモチーフは元雜劇でより多彩に用いられている。たとえば「東坡夢」の場合がそうである。全體の筋は、蘇東坡は、黃州に流される途中で知り合つた歌妓の白牡丹を使い、東林寺の佛印和尚（東坡の舊友、謝端卿）をさまざまに誘惑して還俗させようとするが、逆に二人とも濟度される、というものである。中に、佛印は牡丹の誘惑に負けるところか、却つて酔臥した東坡の夢の中にきれいどころの「花間四友」を登場させてまわりつかせ、東坡をからかう場面がある。ここで佛印が、

梅也你輕謳着白雪歌。柳也你與我滿捧着紫金杯。桃也你和他共枕同眠。竹也如魚似水（二折〔哭皇天〕）。

梅よそなたは軽く白雪歌を唱いなさい。柳よそなたは紫金杯にのみなみと注いで捧げなさい。桃よそなたは彼と枕席を共にしなさい。竹よそなたは夫婦のごとく睦みなさい。

と命じているように、梅・柳・桃・竹の精が歌舞酒色で東坡を籠絡しようとする。四人は東坡の求めに應じて舞い、東坡もそれぞれに詩を贈る。

「東坡夢」の場合は部分的に用いられているだけだが、「莊周夢」(『元曲選外篇』所收)の場合は全篇がこのモチーフの上に成り立って

いる。

類似のものはわが國にも豊富に存在する。たとえば謠曲の「紅葉狩」がそうである。これは

平の維茂が紅葉の時分、鬼神を退治しようと戸隱山に分け入るが、山かげで酒宴をしていた女たちに誘われ、酔いつぶれて眠る。目覚めて悪鬼と變じた女と闘い、斬り伏せる。

というもので、鬼が美女に化けて男を誘う話と、平の維茂が鬼を退治した話の二つが接合されている。前者は前述のと類似のモチーフである。

元雜劇の中には、このモチーフによりながらも、内容は一新されて完全な戀愛劇となっているものがある。「張天師」はその一つである。

書生の陳世英は、ある中秋節の夜、花園で琴を弾いていた。その頃月中の桂花仙子は、羅睺・計都の二星につきまといわれていたが(月觸を意味するらしい)、世英の琴の音に感動した婁宿星は二星を追い拂つて彼女を救う。その恩に報いるために仙子は世英のもとに下り、共に酒を酌み交わして情を通じ合い、來年の中秋節の再會を約して別れる。

世英は仙子に戀い焦れて重い病氣になる。たまたま訪ねてきた張天師が、世英の花月の妖につきまといわれているのを見抜き、法力で仙子を初め、彼女に連れ立って世英のもとに下つた風の女神や桃花仙を糾問し、長眉仙のもとに護送させる。長眉仙は、仙子に連れ合いないので下界の男を思つてしまったなどを酌量してその罪を許す。

これについて青木正見氏は、「花の精及び風の女神に關しては、唐

人の「博異記」に載せられて居る崔元徽が月夜に美女楊氏李氏等の花精及び封十八姨に遇つた話に本づく。」と指摘しているが、直接この故事を襲用したというよりは、前に見たように普遍的に存在した「植物の精と男との交歡」のモチーフを使用したとすべきだろう。以下内容を考察する。

世英の相思病は、「三十三天離恨天最高、四百四病相思病最苦」(二折)という程思いつめたものであり、瘦せ衰えて見るかげもなく、一日と重くなつた。

さて待ちに待つた中秋節がやつて來た。世英は氣力を振り起こして花園に出てくる。早く日が沈んで夜になってほしい。遅々たるその歩みが恨めしく思われる。

しかしその夜になつても待つ人は現われない。

眼見的颯天遠入地近、無那活的人也(二折)。

というのが絶望の果ての彼の述懐である。

最後の場面、判決が下るまで待機せよと、長眉仙の言いつけで仙女は陰山の左側に護送されることになる。世英の病氣を治すには、仙女のこの惨めな様子を見せるに限ると判断した長眉仙は、世英の魂魄を引つ張つて來させる。それを察知した仙女は、

滝的阿下瑤階。將兩步做一步蕪。呀早轉過甚人來。是是是有情人

陳秀才。他他他怎容易到天台。敢敢敢爲着我舊情懷。待待待折桂子

索和諧。怎怎怎不教我添驚怪(四折「梅花酒」)。

いきなり玉の階をかけ下る。二歩を一步にして突進する。おや誰かやってくる。情の深い陳秀才だわ。どうしてこの天宮に來れたのだろう。わたしがかつて思いを寄せたために、桂の枝を折つて(桂花仙子のわたしをわがものにして) いっしょにならうというのね。

どうして驚かすにおれよう。

と唱う。繰り返しの三字をたたみかけて仙女の驚きと喜びとをよく表現している。對面なつた後、二人は急に走り出していっしょに逃げようとするが、所詮叶わないのである。

明の朱有燉「張天師明斷辰鉤月」(奢摩他室曲叢)所收)はこの作品を改作したものと思われる。大筋はほぼ同じだが、陳世英のおかげで危難を脱した嫦娥は、世英にお禮しなければと思いつつも果たせないでいると、それに乘じて桃花の精が嫦娥を騙つて現われ、世英をたぶらかす。しかし張天師の法力によってその正體が暴露され、世英の熱も一時にさめる、というふうに改められていて、筋書はやたらに入りこんでいるが、前者に見られた清新な戀の描寫はすっかり姿を消している。二者を比較することにより、前者の戀愛中心主義がより鮮明に浮かび上がってくる。

「碧桃花」は、横死した女が碧桃の精となり、かつて婚約した男と愛し合い、やがて人間に生き返つてめでたく結ばれるというものである。つまり植物の精との交歡と、前掲「崔待詔生死冤家」などに見られる、幽鬼となつて生前に契つた男を慕う話と、二つのモチーフが重ね合わされた構成になっているのだが、中味は「張天師」と同様戀愛そのものである。

同じモチーフの應用はこの二作に止まるものではなく、「紅梨花」「桃花女」などかなり廣範圍に及んでいるように思われる。これらも大部分は男女の離合を扱つたいわゆる風情劇だが、筆者が先に定義した「戀愛」には必ずしも適合しないので、これ以上ふれない。他日別の角度から考察して見たい。

とまれ「張天師」「碧桃花」の二作とも、異類婚の外衣をまとい

はいるが、中味は全くの戀愛物であり、この點で前述の「張生煮海」「柳毅傳書」と軌を一にするものである。

六

以上で異類婚説話の變容を一通り跡づけたが、ここでこのような話
が傳承された場―現實の生活のどのような事象を踏まえて異類婚説話
が成立したか―について考えてみたい。

成人に達した男が、結婚前に性的な訓練を受ける宗教的な儀式があ
り、搜神記の話はそれを反映していると思われる。折口信夫は「巫女
と遊女と」(『全集』一七)で次のように説いている。

(男の結婚する場合)大抵、村の青年に結婚法を教へる女があつたのである。その女は宗教的な威力をもった人であつて、適齡に達した男等に、結婚の方法を教へるのであつて、昔の人の理想としてゐたのであらう。……普通神社に仕へてゐる巫女が、さうした爲事をしたのは、古く記録に載つてゐる。神社に仕へてゐなくとも、宗教的な要素を持つてゐる女であればよい。中には旅をして來る遊女もあり、村に附屬してゐる遊女、神社・寺院等の附近に住む遊女等がある。

中國の六朝時代にも同様な儀式が存在したことを示す直接的な資料はないが、説話からそれを窺うことは可能なように思われる。

話の中の神女や鬼女は巫女的な側面を強く漂わせている。成公智瓊は弦超と夫婦になつた後、『易』七卷の注釋を著わし、弦超はその意に通じて占いをしたとあるが、智瓊のこゝろした能力は言うまでもなく巫女のものである。

成公智瓊や、盧充と契つた鬼女が男に詩を贈つてゐるのは前述の通

りだが、作詩は巫女特有の技能だつた。中山太郎『日本巫女史』によると、古代の巫女は、託宣を下したり神意を占う際には歌謠の形式を用いるのが常で、自然歌人的素養が深かつたという(同書二篇六章一節の二)。中國でも託宣や卜占に韻文を用いるのは普通のことだから、同じような事情があつたのではなからうか。

一方、對する男たちは例外なく未婚の若者である(談生だけは「年四十」とあるが、未婚の點では變わりがない)。前掲の折口説には、結婚の方法を教へたとあるが、成公智瓊も弦超のために、『易』の注釋とともに『夫婦經』なるものを作つてやり、その後で弦超は人間の女性を娶つたとあるから、智瓊は夫婦の道を教へたらしく見えるし、卷四の河伯の娘と結婚した男も後に人間の女を妻としてゐる。

實際は巫女なのに、なぜ神女とされるのだらうか。M・エリアードによると、凡そあらゆる儀禮は、太初(初)の神々の行爲を模倣してとり行なわれる。結婚や、「その目的が統一的全體性の回復にある」兩性の結合儀禮などは、神々の結婚に則つてなされる。結婚は天地の結合やそれによる宇宙の再生を意味するので、それにあやかろうとするのである。

中國の場合神婚の代表的なものは、太陽神たる東王公と、月神たる西王母の年毎の交會であるが、牽牛・織女などがそれぞれの代理として立ち現われることもある。

異類婚説話の神女たちも、織女と同じく西王母の膝下にあり、こうした神女を名のる巫女に、男たちもおそらく神の資格で對したのであらう。

さてこゝろした儀式が一旦宗教的意味を失なうと、巫女は遊女と選ぶところがなくなるのは言わずして明らかである。事實「神社に仕へた

巫女―若しくは神社を放れた巫女が、娼婦の先驅者となつてゐる」で、そのため「各地の遊廓が神社を目安として發達し繁昌した」のだといふ(中山太郎前掲書二篇第三章五節の五)。

しかし注意すべきは、後代の、巫女性を留めなくなつた純然たる遊女の間にも、なお往事の儀式が傳承されていることである。折口信夫は前掲「巫女と遊女と」で、要旨次のように論じている。

江戸時代、遊廓の客は、祭りの際來臨する神が饗宴を受けるのと同じ形でもてなされる。ある式が行なわれ、そこに正客や陪從の客が來臨し、主人が酒肴と藝人とをすすめ、客もこれに應じた後、その藝人を自分の思い通りにした。性欲をほしいままにするのではなく、座敷のとりさばきをどうするかに腐心した。

唐代の遊里も、事情はほぼ同じだつたと思われる。江戸の遊廓のよきな客迎への祭禮があつたかどうかは詳らかにしないが、遊女は「仙」、遊里は「洞」と呼ばれていて、遊里は神仙界に見立てられている。「北里志」の著者孫榮の妓女に贈つた次の詩などは、その邊の雰圍氣を端的に傳えるものである。

彩翠の仙衣紅玉の膚、輕盈にして年は破瓜の初めに在り。靈盃は酔いて劉郎に勸めて飲ましめ、雲髻は慵く阿母(西王母を指す)を邀えて梳らしむ。寒の、縁り帯ぶ寶を侵すを怕れず、毎に風の、情として(なまめかしく)持す裾を擧ぐるを憂う。譏に西子長粧の様を圖るも、西子は元來未だ如くを得ず(北里志)王國兒の條。また五代・韋毅編「才調集」卷四に「贈妓人」と題して收める。

自らを天台山の仙境に迷いこみ、神女と契つた劉晨になぞらえてい

る。こゝろした遊里を仙境に見立てる發想も、もし用例が少數であれば單

なる思いつきと見られないこともないが、『北里志』や元嶺、李商隱の詩などに數多く見受けられるから、やはり何かさう見立てる根據があつたに違いない。

これは、かつて巫女がその任に當つた宗教的儀式的餘習ではないだらうか。その本來の意味を喪失しながらも(客は未婚の若者と限つていない)、神婚という枠組だけは傳えられてきたのだと思われる。

なお前掲折口論文に、遊廓には身分のある者が自由に出入したから、それに應ずるため遊女も藝事や文學に深い造詣をもつたとあるが、唐代の妓女も全く同様で、「その中の諸妓は多く能く談吐し、頗る書を知り言語する者有り。公卿より以降、皆表徳を以てこれと呼ぶ。その品流を分別し、人物を衡尺し、應待の非次なるは、良に及ぶべからず。……比常蜀妓薛壽の才辯を聞き、必ず人言に過ぎたりと謂えり。北里三子の徒を親れば則ち薛壽は徳に慚ざる有り。」(北里志)序)とまで推稱されている。特に作詩をよくしたことは、妓女の詠んだ詩が數多く同書に收載されているところからわかる。

ところで唐代の異類婚説話は、全て遊里の場を踏まえて發想されたものである。前掲「周秦行紀」は遊里での享樂を鬼女との歡會に託して描いたものに他ならないし、『遊仙窟』も、實際は遊里の光景を寫したものであることは指摘されて久しい。なお後者の散文(駢文)と詩詞とを交互にくり返す形式は、「佛敎文學の翻譯の形式の影響をうけたもの」とか、當時流行した變文の影響を受けているとか説かれるが、これは詩詞に堪能な妓女が登場するからさうなるのだと解釋すべきであらう。

更に「李章武傳」や「任氏傳」すら、遊里での體驗を反映すると考えられる。前者では女が東郷の婦に語つたとされる次のことばがこの

推定を助ける。

我が夫の室は猶お傳舎の如し、人を関すること多し、その往來に於いて見調する(言い寄る)者は、皆財を殫くし産を窮め、甘辭もて厚く誓うも、未だ嘗て心を動かさず。

後者でも初め男はいとも簡単に任氏と情を通じているし、二人の結婚後新居を訪れた男の友達が、任氏の美貌に感じて人妻であるにもかかわらず激しく言い寄るのも、任氏に妓女的性格があるためだと思われる。その時は一應拒まれるが、後には狎れ親しんで、二人の男が任氏を共有している趣きすらある。

七

今までは専ら異類婚説話を扱ってきたが、ここで目を轉じて、人と人との戀愛を描いた作品を問題にしよう。もしスタンダードのいうように戀愛の觀念が時代とともに發展するものなら、それは兩者に等しく反映されるだろうから、人間同士の戀愛を描いた作品も、異類婚説話と同様な變容を示すと豫想される。果たしてそうか。

六朝の樂府の中には多數の戀歌が存在する。これをどう解釋すべきだろうか。

折口信夫は「古代生活に見えた戀愛」(『全集』一)で、萬葉集や日本書紀所載の古代の戀愛の歌は、男女の交歡の場で唱ひ交されたもので、性的な問答を中心に、多くはことばの上の争いになっている。従つてその戀愛には眞實味がなく、あるのは性的な激情と機智の閃きだけである、と述べている。詳しい分析をする用意がないが、かけ合いの歌が多く、かけことばが頻繁に用いられる樂府の戀歌も、これと同様な解釋ができるのではなからうか。なお他に戀愛を扱った作品は六

朝には存在しない。

下つて唐代になると、周知のように傳奇の中に戀愛を扱った作品がいくつも見られる。その一つ「鶯鶯傳」は言うまでもなく後の『西廂記』の粉本となつたもので、書生の張生と崔鶯鶯とはさまざまな心の行き違ひがあつた後で熱烈に愛し合うようになるが、そのうち張生の女性觀が變化して女を捨てるという話である。

陳寅恪は、この鶯鶯は一應名門崔氏の出となつてゐるが、張生の作つた「會眞詩」や、元稹がそれに續けて詠んだ「會眞詩」の「眞」字は「仙」字と同義で、「會眞」はつまり娼妓と歡會することであるから、鶯鶯は娼妓であつたと見なしている。筆者も同感だが、更にもう一つの論據を示してこの説を補強したい。それは元稹が張生の詩(その内容は示されていない)に續けて作つた「會眞詩」の内容である。この詩は、事件の經過には全く即應していかないばかりか、二人の清新な戀愛を詠つたにしては脂粉の臭いが強すぎる。中程の數十句をとり出してみよう。

戲調するも初めは微かに拒むに、柔情已に暗かに通ず。鬢を低るれば颯影動き、歩を回らせば玉塵蒙る。面を轉じては花雪を流し、牀に登りては綺叢(もようのあるふとん)を抱く。鴛鴦は頸を交えて舞い、翡翠は歡を合せて籠にあり。……汗は流れて珠點々、髪は亂れて綠葱葱たり。方に千年の會を喜ぶに、俄かに五夜の窮まるを聞く。

こうした色調で貫ぬかれており、どう考えても二人のつつまじやかな逢瀬を詠うにふさわしくない。妓女との交歡を詠じたものとするのが穩當であらう。

かれこれ考え合わせると、元稹が、「會眞詩」に詠んだような遊里

での體驗を敷衍創作して「鶯鶯傳」を書き上げた可能性が強い。

それはともかく、この小説の新しさは、何といつても戀する男の心理が活寫されているところにある。張生は初め鶯鶯に會つてその美貌に驚き、「これよりこれに惑い、その情を致さんと願ふども、得るに由し無し」。だしぬけに小間使いの紅娘に鶯鶯への思いを打ちあけて仲介を頼み、驚いた紅娘が逃げ出すと、やめておけばよかつたと後悔する。翌日「羞じてこれを謝し、復た求むる所を云わず」。しかし紅娘に情詩を贈るよう勧められ、「大いに喜び、立ちどころに春詞二首を綴りて以てこれに授く」。

鶯鶯から密會に誘う詩が屈いたので勇んで出かけると、意外にも嚴しく叱責され、「自失することこれを久しうし、復た諭えて出で、ここにおいて望みを絶つ」。しかし幾晩かの後、鶯鶯は自ら男のもとを訪れ、一夜の歡を共にする。張生はすっかり感激し、彼女が歸つた後、夢ではなかつたかと疑っている。

このように絶望と歡喜の間を揺れ動く男の内面の描寫が、この作品の價值をしっかりと支えている。

このような新鮮な戀愛心理の描寫は、この作品に限つて偶然に現われるものではない。元稹は、妓女との歡會を詠んだと思われる艶詩を數多く作っているが、『才調集』所收、『元氏長慶集』には收められていない、そこにも従來の詩になかつた、ある新しさが見られる。特に「古決絶詞三首」にそれが顯著である。第三首を掲げる。

夜夜相抱きて眠るも 幽懷は尙お沈結するに、那ぞ堪えん一年の事を、長えに一宵に説かしむるに(二人の逢瀬を牽牛・織女のそれに喩えている。これが何を意味するかは前述した)。但だ久しく相思うに感じ、何の暇ありてか暫し相悦ばん。虹橋は夜に薄りて成り、龍駕は

晨を侵して列なる。生きては野鶴の性遲廻するを憎み、死しては天雞の時節を識るを恨む。曙色漸く瞳瞶とし、華星次いで明滅す。一たび去らば又た一年、一年何れの時にか微せん。この迢遞の期有るは、死生の別れに如かず。天公隔にしてこれ相憐れむを妬まば、何ぞ便ち相決絶せしめざる。

その新しさとは、一口に言つて従來の戀歌にはなかつた戀愛の心理、内面の描寫、及びそれに伴なう感情の眞摯さである。このような細やかな感受性があつて始めて「鶯鶯傳」における張生の心理描寫が可能になつたのである。

「鶯鶯傳」の二人はかく熱烈に愛し合つたにかかわらず、張生は最後には鶯鶯を捨てる。高門の子女と結婚することが出世の必須條件であつた當時にあつては、妓女との結婚は考えられなかつたからである。従つて張生の、ひいては元稹の戀愛感情には自ら限界があつたと思われる。山本和義氏の説によれば、元稹は妻の章叢を亡くした悲しみを三三首の悼亡詩に詠っているが、『元氏長慶集』に收める、そこでは共に貧賤の生活に耐えてきた亡き妻への思いを吐露し、激しく悲しみを燃焼させている。これに較べれば艶詩中の戀愛感情はずつと控え目であり、現實との對決を避けつつ内省的に詠われている。彼にあつてはやはり結婚生活が中心的存在であり、戀愛は附隨的なものでしかなかつた。

「鶯鶯傳」を、二人が障害を乗り越えて最後の結ばれるという筋立ての、完全な戀愛文學とするには、元稹の、ひいては當時の社會の、戀愛の價值に對する認識が餘りにも不十分だつた。その認識が十分に成熟する後代に至つて始めてそれが可能になるのである。

元曲「西廂記」の張生は一介の書生で、對する崔鶯鶯は宰相の遺兒

であるというふうに、「鶯鶯傳」とは設定自體が違っているが、ここでは、わが家は三代にわたって無位無官の婿をとったことはないといふる鶯鶯の母が二人の障害となる。しかし結局二人の愛情の強さがそれを乗り越えていくのである。

劉開榮によると、書生と妓女とが結ばれる「李娃傳」や、男の心變わりによって戀は破綻するが、その背信を作者は批判している「霍小玉傳」の方が、戀愛に對する考え方は進んでいるといふ（前掲書第五、六章）。なるほど筋立てだけを見ると、こうも思えてくる。

しかし作品の内部に立ち入って見ると、この二つには「鶯鶯傳」に見られるような戀愛心理の描寫がない。「李娃傳」では、男の李娃に對する感情は描かれないし、後半における李娃の、男に對する獻身も、純粹な愛情からというよりは、節義感から出たものであり、それは末尾における作者の、

嗟乎、倡蕩の姫にして、節行かくの如し。古先の烈女と雖も、踰ゆる能わざるなり。焉んぞこれが爲に歎息せざるを得ん哉。

という評價と呼應するものである。この話をしくんだ元曲の「曲江池」は二人の愛情に焦點をあてており、比較することにより「李娃傳」の戀愛文學としての異質さがより明らかとなる。

「霍小玉傳」でも、二人の愛情を中心に描くというよりは、男の背信行為を責めることに重點が置かれていて、作者が男に求めているのは、女に對する愛情ではなく、境遇が變わっても心變わりのしない節操であるという感じが強い。結末は逆でありながら、體している精神は「李娃傳」と同一である。

結局「鶯鶯傳」もこの二作品も戀愛小説としては未熟で、これは前

述した、唐傳奇の「李章武傳」「任氏傳」「柳毅傳」などが戀愛小説的側面をもちながらも、まだ志怪的ふんいきを色濃く留めていたり（前二者、愛情よりは報恩の觀念が先行する（柳毅傳）のと、軌を一にする事柄ではないだろうか、ともに戀愛觀念が十分成長していない時代の産物である。

なお韻文の世界では、周知のように杜牧や李商隱に戀愛詩がある。筆者の大ざっぱな印象では二人ともやはり妓女とのやりとりが多く、かつ前代にはなかったある新しさが動き出している。元稹の艶詩と日を同じくして談じてもよさそうである。

八

中國人の物の考え方は、唐から宋へかけて大きく變化した。従來の、天や神の權威に盲従する行き方を捨てて、人間の理性をよりどころに思想と行動を決定するようになる。人間の内面が見直されて人間の自覺が促され、自然も人間の主觀から切り離されて合理的に觀察されるようになった。それまで無批判的に信奉されてきた經書が、こうした觀點から讀み直され、やがて宋學が成立するのなどはその顯著な例である。

この近世的な理性中心主義の流れは宋代に至って洪流となるが、細流はすでに唐の中ばを過ぎる頃からスタートしている。柳宗元の合理主義などがそれである。

戀愛はすぐれて内面的な問題である。他人に思いを寄せることは、即ちそうする己れ自身を自覺することでもある。その自覺があれば、それを表現することも可能になる。従って自我の覺醒のないところに戀愛は成立しないのである。

スタンダールは、未開人、ローマ人は「この作用（結晶作用）の觀念さえもたず、ただ肉體戀愛においてのみそれを知っていた。」と述べている（前掲書五一頁）。中國では六朝以前にこれが該當し、唐の後半に至って始めて戀愛の觀念が生まれるが、それは理性中心主義の誕生と時を同じくするものであった。この戀愛觀念は唐一代を通じて十分に成長し切れず、従って未熟な戀愛文學しか現われなかった。それが成長し切るのは次の宋代以降である。

なお唐一代を通じて戀愛文學は、異類婚のものであれ、人間同士のものであれ、全て妓女の世界と深くかかわっている。これは、當時にあっては遊里が唯一の男女交際の場であり、そこに戀愛がめえやすかったためだと思われる。

しかし戀愛が遊里に限られている段階では、その成長には自ら限度がある。それが一般市民の間に進出し、普遍的にその價值を認識されてこそ、十全な成長も期待できるのである。この點でもやはり次代を待たなければならなかった。

注(1) 筑摩書房版『柳田國男集』八。以下頁數の表示はこれによる。

(2) この「棘鞆寶」は、女の説明によると、崑崙の玄圃中に出るもので、最近西岳で玉京夫人（神女の名）から授けられたものであるという。更に女は最後に空中より男に別れのあいさつをしている。幽鬼でありながら神女とほぼ同様の描き方がしてあり、唐人も兩者を同類と見なしていたことがわかる。

(3) 唐傳奇のテキストは、魯迅校録『唐宋傳奇集』を用いた。

(4) たとえば卷一二に、蜀の西南部の高山に住む猿が美女をさらって来ては子を生ませて養育させた、その邊一帶の楊姓の家はみなその子孫であるといひ、卷一四に、盤瓠という名の犬が王の娘を妻として子を設け、

中國の西部や南部に住む異民族の祖先となったとある。

(5) 『京本通俗小説』に「碾玉觀音」と題して同文を収める。

(6) 『警世通言』所收の「白娘子永鎮雷峰塔」はこれとほぼ同じ話であるが、筋書が更に複雑となり、人物の性格描寫も細密になっている。なお

清朝になってから出た『西湖佳話』は、「雷峰怪迹」と題して『通言』のと同文の話を収録している。

(7) 『中國小説史略』五。

(8) 柳田國男も、近世は人に恐れられたり憎まれたりすることが多い蛇や狼も、かつては神靈の化身として崇敬されたことを強調している（前掲書）。

(9) 前川堅市譯、岩波文庫版『戀愛論』上による。

(10) 『太平廣記』卷六一、『太平御覽』卷四一などに見える。

(11) 唐、谷神子『博異記』（古今逸史他所收）にもほぼ同様の記事が見える。

(12) 岩波日本古典文學大系『謡曲集』下の指摘。

(13) 同氏『元人雜劇序説』（『全集』四）第四章。

(14) 同じような習俗は、一昔前まで日本各地に見られ、大抵は遊女か年長の娘がその任に當つたという。石川弘義・野口武徳『性』（弘文堂）おるく養書、昭和四九年）参照。

(15) 堀一郎譯『永遠回歸の神話』（一九六三・未來社）

(16) 小南一郎氏『西王母と七夕傳承』（『東方學報』京都四六）参照。

(17) 小南一郎氏『漢武帝内傳の成立』（一七）（『東方學報』京都四八）参照。

(18) 陳寅恪『讀鶯鶯傳』（『陳寅恪先生論文集』下、臺灣、一九七四）。また内田道夫氏『中國小説研究』（昭和五二年、評論社）六九頁。

(19) 注(7)と同じ。

(20) 目加田誠氏『唐代小説について』（『東方學』二）。

(21) 注(19)の内田道夫氏著書七五頁。

(2) 陳寅恪前掲論文。なお劉開榮『唐代小説研究』も鶯鶯の教養の程度に着目しながら妓女説をとっている(同書五章三節)。

(2) 陳寅恪前掲論文、劉開榮前掲書五章。

(2) 同氏「元稹の艶詩及び悼亡詩について」(『中國文學報』九)。氏は北宋・趙令時的「辯傳奇鶯鶯事」(『侯鯖錄』卷五)の説を受けて、「鶯鶯傳」に描かれたような戀愛を元稹は實際に體驗しており、相手の女性は妓女ではなく、平凡な堅氣の市民だと見ておられる。そして元稹のこの體驗をその「戀愛」だとしておられるのだが、筆者のこの點に關する考えが異なることは前述した通りである。

(2) これについては、重澤俊郎氏「柳宗元に見える唐代の合理主義」(『日本中國學會報』三)参照。